

## 中世小歌の研究 : 漢詩・漢語との関連性の視点から

著者	謝 林
ファイル(説明)	博士論文要約 博士論文要旨 最終試験結果の要旨 論文審査の要旨
学位授与番号	17701甲人社研第48号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/00032127">http://hdl.handle.net/10232/00032127</a>

(別紙様式3)

## 博士論文要約 (Summary)

平成 31年 4月 入学

人文科学研究科 地域政策科学専攻

氏名 謝 林

タイトル	中世小歌の研究 ―漢詩・漢語との関連性の視点から―
<p data-bbox="236 703 466 734">「序論および目的」</p> <p data-bbox="225 750 1337 1021">室町時代後期に流行した歌謡の一種を指す「小歌」は、同時代に隆盛期を迎えたことから、「中世小歌」又は「室町小歌」とも称される。小歌が宮廷で生まれたことから、最初に享受した階層は貴族や社会の上層に属する人物であったことは想像に難くない。その後、民間の芸能が次第に宮廷宴会の場に流れ込み、中世小歌が醸成される環境が形成されたと考えられる。このような中世小歌の享受は、公家のみならず、僧侶、武士や庶民の間に拡大浸透していった。</p> <p data-bbox="225 1037 1337 1406">『閑吟集』と『宗安小歌集』は中世を代表する歌謡集である。『閑吟集』は永正一五年(1518)に成立した編者不明の小歌集であり、純粋な小歌と、当時の流行歌謡の一節を小歌に組み入れ編纂したものである。収載された歌数は三一一首あり、中国最古の詩集である『詩経』の歌数と一致する。一方、中世末期に成立した『宗安小歌集』は、二二〇首の歌を有し、『閑吟集』と類似する作品で一定の継承関係が認められている。この二つの小歌集は序文において、大陸の音楽思想に言及していることや漢詩の摂取を示唆していることに加え、所収歌謡の一部にも漢詩からの直接及び間接的影響が認められる点で共通している。</p> <p data-bbox="225 1422 1337 1742">『閑吟集』の中には吟詩句が出自とされる広義の小歌が七首あるほか、「小」の肩書をもつ一首を加えて、何れも五言或いは七言の漢詩の二句によって成り立つものである。また、一部の漢詩的な表現を残したものの歌の半分が和文になっている中間的なもの、完全に漢詩を消化し和文の形でこれを表現するものも数多く存在する。漢詩との関係があることから、これらの歌はある程度の文化教養を身に付けた貴族や武士、彼らと頻繁に交流があった僧侶たちを中心に享受されていたことは容易に想像できるが、歌の伝承を伴い広く社会に流布して下層の民衆にも親しまれるようになった可能性もある。</p> <p data-bbox="225 1758 1337 1977">このような漢詩的色彩を帯びた小歌が、当時の社会に流布していた小歌から抽出された代表的なものなのか、それとも編集した人物の個人的な嗜好によって意図的に作られたものなのかは不明な部分が多い。例えば、『宗安小歌集』の序文にある「伊せ、こまちかうたのことはをかり、白樂、阮籍か句をぬきて、はかせをつけうたひ物になし」という部分に着目すれば、少なくとも小歌の創作は和歌や漢詩からの影響が大きいと考え</p>	

ることができる。本論文は、『閑吟集』と『宗安小歌集』の小歌を中心に中世小歌と漢詩・漢語との関連性を明らかにすることを目的とするものである。

### 「研究対象および研究方法」

これまでの研究の中では、「小歌化」という過程を重要視し、先行する様々な芸種の詞章を小歌と比較するものが多かった。漢詩と関わるものについて、吾郷寅之進氏や小笠原恭子氏など研究には、明確に漢詩と関連するとされる小歌が既に数多く提示されている。

ところで、小歌には伝統的な和文や和歌の中にはあまり見慣れない漢語表現が使用されているという点も注目する必要がある。吾郷氏は、漢詩の小歌化を三種類に分類されていたが、これは原詩句にどれくらい似ているかという詩句の基準で分類しているものである。すなわち、「小歌化」という漢詩から小歌への過程を重視し、原詩の有無を参考基準として三種類にまとめたものである。しかし、各歌を詳細に検討される際に、句の基準から外れていたり、個々の語彙表現を追求しているものも少なくない。如何なる漢詩から影響を受けるかという考察は重要ではあるが、その漢詩を構成する個々の表現をさらに重視し、句の単位で見ただけでなく、語の単位で、すなわち漢詩的表現や漢語からの影響を分析する必要もあると思われる。それによって、より広い視点から小歌における漢詩・漢語の受容が見えてくると考えられる。

本論文は、中世小歌と漢詩又は漢語との関わりを重視し、これまで漢詩や漢語表現という視点からあまり注目されていなかったもの、漢詩や漢語表現の影響を認められているが未だ完全に解明されていないものを中心に考察する。いくつかの章に分けて歌ごとに使用されている特別な表現に重点を置き、他の文献資料における対象表現の有無及び使用されている状況を比較精査する。それにより、小歌が漢詩又は漢語表現を摂取する様態を明らかにし、その摂取によって同歌に如何なる影響を与えたのかについても総合的に分析を行う。なお、ここで言う「特別な表現」とは、これまでの和歌や和文にあまり馴染みのなかったもの、漢詩や漢文に使用されている詩語に準ずるもの及びその傾向を有するものを意味している。

さらに、漢詩・漢語表現を取り入れた小歌には、伝統的な和歌の要素を依然として保留しているものや、謡曲から影響を受けたものも数多く存在する。このような漢詩・漢語の要素と和の要素が組み合わさった過程を明確にすることによって、小歌自体の特色もより明確になると思われ、和漢文学の交流における小歌の位置づけという点で重要な意義があると思われる。

### 「考察」

第一章は、「上林」を詠み込んだ『閑吟集』二六番歌について考察したものである。「上林」という語は、二つの読み仮名「うへのはやし」と「しやうりん」が付記されて

いる特別な語彙である。一首の歌は、「上林」「鳥」「鳴子」などの要素から構成される。中国の漢詩における「上林」は、皇帝の庭園である「上林苑」を指すことが多く、漢詩の世界においては「上林」「鳥」などの詩語の組み合わせが定式化している。中世の文献資料を調べると、禪林文学にも「上林」を詠む作品が一定数存在し、その受容が見られる。これらの考察によって、『閑吟集』二六番歌に表れた「上林」という語が本来は「天子の御苑」という意味の漢語であったことを明らかにした。知識階層に属し一定の漢文学の素養をもつ者でなければ、この言葉に接触する機会は少なかったであろう。そのため『閑吟集』の二六番歌は、当時の巷で流行していた既存の歌を取り入れたのではなく、たとえば『閑吟集』の編者のような漢文学に対して深い関心をもつ人によって作られた可能性が高い。なぜならば、宮中の苑を舞台として、花が散るのを風ではなく鳥のせいにする趣向といい、実用的な道具である鳴子を風流物たる護花鈴に見立てる工夫といい、徹頭徹尾、貴族の気風が漂うこの歌は、庶民の実生活と直結する歌ではなく、大陸から舶来した文化を巧みに生かして小歌の形で表現した和漢折衷のものだったからである。

第二章は、「せいしやう」を詠み込んだ『閑吟集』二八一番歌について考察したものである。「せいしやう」については、これまで様々に解釈されてきたが、合歡の異称としての「青裳」として理解されるのが大勢であった。しかし、中国の文献資料を調べると、「青裳」を「青堂」「青棠」「青囊」などの語で表記されることも多く、当該の知識が伝承する過程の中、異同が生じることを明確にした。当時、「青裳」という珍しい知識を小歌に取り入れることは、貴族や僧侶をはじめ、高度的な教養を有する上層に属する人物の所為であった。また、合歡の漢詩的イメージを考察し、合歡は恋人を待ち続ける深閨の女性というイメージを有することを明らかにした。『閑吟集』二八一番の小歌の作り手は、この合歡の誤伝の異称を歌中に取り入れることで、作り手の高度な知識と大胆な発想力を見せている。さらに、今現在、方言にしか残っていない「つばい」という語は当時流行っていた可能性があり、このような純粋の日本語と漢語としても馴染みのない「せいしやう」を敢えて結び付け、和と漢の要素を融合させた一首を誕生させたと考えられる。その中において、「つばい」の連続的使用によって音楽性が上手く出来上がっただけでなく、合歡の漢詩的なイメージを匂わせ、歌謡の物語性を豊かにした。そして、直接に合歡や夜合といった一般的な名称を使わずに、馴染みのない「せいしやう」が選ばれた理由は、知識の豊富さを誇示したがるというよりも、むしろ遊び心に動かされ、伝唱する相手に歌詞を味わってもらいたい気持ちが潜んでいたと考えられる。恋人を待つという普遍的な主題ではあるが、和漢の配合によって新鮮味が演出されたことが、この一首の特徴なのである。

第三章は、「白菊」を詠み込んだ『閑吟集』の小歌について考察したものである。『閑吟集』には「白菊」を詠み込んだ歌が二首（二〇四番と二〇五番歌）ある。「霜の白菊」の象徴性を明確にするために、小歌以外の諸文芸における菊のイメージを整理し

てきた。

和歌の世界では、菊の美しさを賛美するほか、縁起の良く、延命の効果を持つ菊を祝儀の題材として詠まれている。また、菊の変色性から人の浮気を想起させ、恋の主題にもよく使われる素材である。また、謡曲に登場する「菊」を調べると、「白菊」を老人と美少年に見立てる曲も複数あり、「白菊」は、少年と老人という両面性をもつことがわかってきた。『閑吟集』二〇四番歌は「霜の白菊」という言葉を恋歌の素材として取り入れ、和歌からの踏襲が見られるが、必ずしも男女の関係を物語る歌とは限らないのである。二〇四番歌にある「霜の白菊」を若い美少年に見立てて、男色関係を暗示する歌として理解することもできる。一方、漢詩の世界に目を向けると、「霜」は白髪に喩える手法がよく使われている。その上、「菊」から隠逸者としての陶淵明を常に連想することができるから、二〇五番歌に使用される「霜の白菊」は二〇四番歌と異なり、隠逸の老人を象徴していると考えられる。『閑吟集』には世の無常や年を取ることに對する感慨を歌うものが一定の数で存在し、二〇五番歌もその類に属し、目の前の霜の白菊を見て歌い手が年を取った自分を白菊と重ね合わせて「なんてもなやなふ」という命の儂さに対する詠嘆を発したのではないかと考える。また、『閑吟集』の編者も隠逸の老人というイメージがあると思われることから、「霜の白菊」を老人の象徴として捉え、二〇五番歌を老人の歌、隠者の歌として解釈することもできるのである。

第四章は、「しんこ」という言葉が使用された『宗安小歌集』三八番歌について考察したものである。まず指摘したのは、これまで「しんこ」という表現が「尽期」と解釈されてきたのは、節用集に対する誤解から生じたものだったということである。「しんこ」は、「尽期」ではなく「真箇」として理解すべきだという結論に至った。この修正により、同小歌集七一番歌に使用されている「しんこの君」という表現も「真箇の君」と解釈できると考えられるのである。次に、三八番歌の主旨は、愛情の深い来訪者を賞賛するという従来 of 訳と大きく変わらないが、「しんこ」の意味が従来「尽期」の同義語として解釈した「尽未来（際）」に由来する「永遠」「無限」という意味ではなく、「まこと」「誠実」の意味を有する「真箇」であることを明らかにした。その解釈には本質的な差異がある。さらに、三八番のような漢語系表現が混ざっている小歌は、僧侶たちが吟詠する漢詩文と共通するところが多く、小歌と漢詩との間にある親密な関連性を指摘した。平安時代以来の日本の恋愛観に基づき、単純に「月」や「雨」の要素を借りた小歌と比べていっそう強く誠の心を持つ男を待ち望む女性の心境を表現している。誠意を持つ男であれば、風雨の夜に訪れてくれという話題を歌に詠みながら、漢詩風表現の導入によって真心を持つ相手を待ち焦がれる女性の姿を表現しているのである。一首の歌は非常に短いですが、柔らかく純粋な和風表現と異なり、口語に近い「しんこ」という漢語を利用することで耳に響きやすく力が溢れるように創られている。個々の表現と表現に伴うリズムにより、明るく強気な女性の性格が表現されているだけでなく、伝統的な恋の題材に新味をも加えることに成功している。漢詩に親しむ人が作り上げたあ

と、民間に流布して一時の人気を博したものと考えられる三八番のような小歌は、和漢折衷の意匠で「しんこよの」の一声を発出させて、女性の心境を一気に吐露する手法により、斬新なものとなったのである。

第五章は、『宗安小歌集』の小歌を阮籍の詠懐詩と比較し、『宗安小歌集』の歌の中には、阮籍の漢詩に由来したものが存在することを明らかにし、阮籍の漢詩と小歌の共通性を考察したものである。竹林の七賢人の一人、或いは酒豪として世に知られている中国の詩人・阮籍は、詠懐詩（五言）という八二首からなる長編をもち、『文選』にも一七首ほど収録されている。『宗安小歌集』の序文では阮籍の名が白居易と並べられており、阮籍の作品から影響を受けていることが窺える。『宗安小歌集』一八二番歌をはじめ、阮籍の漢詩と共通する部分を見出し、その影響の実態を検証した。

一八二番歌の形は、「松の風」という要素を表に出さないことに加え、一晚中を強調する「夜もすがら」という部分も阮籍詩の「夜中」と一致性を保っている。それだけでなく、人間が琴を調べるという基本的な設定についても、一八二番歌は阮籍の詩文を忠実に反映している。謡曲の歌と比べて、『宗安小歌集』一八二番の歌は、むしろ一番阮籍の漢詩が描いた原風景に近く、阮籍の詩作群の全体に対する把握が窺える。歌中に描かれた恋に惑わされる主人公が夜になっても眠れない。その理由は、相手の人がそばにいないからなのである。このような独りの寂しい雰囲気を作るために、「琴」という要素が上手く利用されている。漢詩の世界において琴の音から松の風を容易に連想することができることから、主人公が夜中に起きて北の山岡に登って琴を調べ始めることによって「松風」という言葉として具体的に言わなくても伝統に従って松風の音が存在することとなるだろう。また、日本語の「松」は「待つ」と通じるから、主人公が琴を調べることは、実際に恋人を待っていることを暗示していると推察することもできる。この一首の歌は、阮籍の漢詩を素材として、聞き手に「北の岡」や「琴」を通して「松（待つ）」のイメージを連想させ、夜中に恋人を待ち続ける主人公の寂しさを醸し出すという、高度な技法を用いた和漢のイメージを重ね合わせる小歌ではないかと考えられる。『宗安小歌集』の序文に持ち出された阮籍の名が、決して酒を好むといった表面的な理由ではなく、彼の作品と深い関連性をもつことを明らかにした。

また、阮籍の『楽論』を考察し、阮籍の音楽思想と小歌の性質との接点を分析した。それにより、「物」に対する描写や「移風易俗」という音楽思想という点において両者が共通していることを明らかにした。小歌と阮籍の詩文は、何れも中国の音楽理論中の「万物之情」「自然之道」を重視し、自然の要素を常に歌に取り入れ「移風易俗」という社会的効能を目指している。これは、小歌が阮籍の漢詩に接近した理由の一つであると考えられるのである。

## 「結論」

本論文は五章にわたって個別に小歌を考察してきた。本論文が追究する小歌が漢詩・

漢語と如何に関わっていたのか、漢詩が如何に小歌化されたのかという問題について、次のような結論を得た。第一に、小歌は句（漢詩句）の単位で漢詩を摂取しただけではなく、語（漢語）の単位において漢詩の一場面を彷彿させることもあった。原詩や原典を重視することは確かに重要ではあるが、原詩句が特定できないものに対しても、歌中において吟詠される個々の語（漢語）を精査することで、より全面的に漢詩と小歌の関連性を把握することが可能になった。第二に、小歌は「物」のイメージを上手く利用している。この「物」に凝縮されたイメージは漢詩の詩語から流用されることが多い。小歌は万物の動静に注目し、自然と人間の調和を目指し、「移風易俗」の社会的効果を追い求めるものである。『閑吟集』の序文に記されているように、世の中のすべての「物」は歌の主体である。その所収歌数は中国最古の詩集『詩経』と一致していることも「物」が重視されていることを示唆している。多くの「物」を取り入れた『詩経』の歌は、社会や家庭、男女の恋愛などを主題にしている。小歌はこのような『詩経』の世界に憧れ、「物」に着目し、物による人間の繋がりを目指していると考えられる。第三に、小歌は、和と漢の要素を上手く融合させたものである。その中には、類例のない大胆な発想もあり、小歌ならではの新しさを見せている。和歌や漢詩のような雅の文芸は、もともと貴族や僧侶など社会の上層に属する人の専有物であり、社会の下層に暮らす人々と無縁なものであった。中世は戦乱の続く社会変動期であり、人々は心の慰めを求めていた。小歌は、人の心を慰める役割を果たしたものである。社会秩序の崩れにより、かつて上層階級に壟断された文学や知識は、次第に民間に流入していった。この過程において、小歌は漢詩の優れた部分を積極的に吸収しながら俗なるものを配合し、高雅と卑俗を共演させた新しい文学の様式を世に送り出したのである。

#### 「参考文献」

- ・複数の章に関わるものは、冒頭に掲げることにする。
- ・全ての参考文献は、著者名または文献名の五十音順に掲げることにする。

#### 〔小歌のテキスト〕

『閑吟集』……日本古典文学会監修・編『閑吟集 宮内庁書陵部本』（『復刻日本古典文学館』第二期第一回配本）ほるぷ出版 一九七六年

『宗安小歌集』……国文学研究資料館編『中世歌謡資料集』（国文学研究資料館影印叢書 第三卷）汲古書院 二〇〇五年

「隆達節歌謡」……小野恭靖編『「隆達節歌謡」全歌集 本文と総索引』笠間書院 一九九八年

#### 〔小歌の研究書・注釈書〕

吾郷寅之進著『中世歌謡の研究』風間書房 一九七一年

浅野建二著『閑吟集研究大成』明治書院 一九六八年  
浅野建二著『新訂 閑吟集』岩波書店 一九八九年  
浅野建二校註『中世歌謡集』（日本古典全書）朝日新聞社 一九五一年  
浅野建二・志田延義・新間進一校註『中世近世歌謡集』（日本古典文学大系 44）  
岩波書店 一九五九年  
浅野建二校註『室町時代小歌集』（新註國文學叢書）大日本雄辯會講談社 一九五一年  
井出幸男著『中世歌謡の史的研究—室町小歌の時代』三弥井書店 一九九五年  
植木朝子著『中世小歌 愛の諸相 『宗安小歌集』を読む』森話社 二〇〇四年  
白田甚五郎他校註『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』（新編日本古典文学全集 42）  
小学館 二〇〇一年  
小野恭靖著『中世歌謡の文学的研究』笠間書院 一九九六年  
北川忠彦校註『閑吟集 宗安小歌集』新潮社 一九八二年  
笹野堅校註『近世歌謡集』（日本古典全書 第七十五回配本）朝日新聞社 一九五六年  
笹野堅著『室町時代小歌集』萬葉閣 一九三一年  
志田延義著『続日本歌謡圏史』至文堂 一九五八年  
志田延義著『日本歌謡圏史』至文堂 一九六八年  
中哲裕著『閑吟集定本の基礎的研究』（新典社研究叢書 112）新典社 一九九七年  
秦恒平著『閑吟集 孤心と恋愛の歌謡』日本放送出版協会 一九八二年  
藤田徳太郎著『近代歌謡の研究』人文書院 一九三七年  
藤田徳太郎著『古代歌謡乃研究』有精堂出版 一九六九年  
藤田徳太郎著『歌謡文学』河出書房 一九三八年  
真鍋昌弘著『中世近世歌謡の研究』桜楓社 一九八二年  
真鍋昌弘著『中世の歌謡—『閑吟集』の世界』翰林書房 一九九九年  
真鍋昌弘著『中世歌謡評釈 閑吟集開花』和泉書院 二〇一三年  
真鍋昌弘他校註『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡』（新日本古典文学大系 56）岩波書店  
一九九三年  
松村英一著『閑吟集私解』（一～四二）『国民文学』 一九三三～一九三七年

〔和歌類〕

「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観』角川書店 一九八三年～一九九二年

「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver.2』角川書店

二〇〇三年

菅野禮行校註『和漢朗詠集』（新編日本古典文学全集 19）小学館 一九九九年

〔禅林詩文・抄物類〕

上村観光編『五山文学全集（第一～第四卷）』思文閣 一九七三年



塙保己一編『続群書類従 第十二輯上 文筆部』続群書類従完成会 一九〇五年

塙保己一編『続群書類従 第十三輯上 文筆部』続群書類従完成会 一九〇七年

塙保己一編『続群書類従 第十三輯下 文筆部 消息部』続群書類従完成会

一九〇七年

佛書刊行会編纂『翰林五鳳集 第一～三』（大日本佛教全書 144～146）佛書刊行會

一九一四年～一九一六年

『抄物資料集成（第二卷～第五卷） 四河入海（一～四）』清文堂 一九七一年

『中華若木詩抄 湯山聯句鈔』（新日本古典文学大系 53）岩波書店 一九九五年

#### 〔節用集・辞書・辞典類〕

『色葉字類抄研究並びに索引 本文・索引編』風間書房 一九六四年

『改訂新版 文明本節用集研究並びに索引（影印篇）』勉誠社 一九七九年

『改訂新版 古本節用集六種研究並びに総合索引（影印篇）』勉誠社 一九七九年

『印度本節用集 和漢通用集他三種研究並びに総合索引（影印篇）』勉誠社

一九八〇年

『角川国語大辞典』角川書店 一九八二年～一九九九年

『時代別国語大辞典 室町時代編』三省堂 一九八五年～二〇〇一年

『大漢和辞典』大修館書店 一九五五年～一九五九年

『日本国語大辞典 第二版』小学館 二〇〇〇年～二〇〇二年

『邦訳 日葡辞書』岩波書店 一九八〇年

#### 〔序章〕

小野由紀子著「『宗安小歌集』の一考察」『成蹊国文』第二号別冊 一九六九年四月

小野由紀子著「『宗安小歌集』の筆者について」『日本歌謡研究』第九号

一九七〇年二月

賀茂百樹再校訂『賀茂真淵全集』（第六巻「続万葉論」）吉川弘文館 一九二九年

賀茂百樹再校訂『賀茂真淵全集』（第七巻「古今和歌集打聴」）吉川弘文館 一九二九

年

志田義秀著『日本文学論素描：歌謡圏の国文学』成美堂 一九三六年

高野辰之編『日本歌謡集成』（巻一 上古編）東京堂出版 一九六〇年

徳江元正編『室町藝文論攷』三弥井書店 一九九一年

西村紫明著「閑吟集と狂言歌」『謡曲界』一九二六年六月

久松潜一校訂『契沖全集』（第八巻）岩波書店 一九七三年

久松潜一他校注『歌論集 能楽論集』（日本古典文学大系 65）岩波書店 一九六一年

『江家次第』（新訂増補故実叢書）吉川弘文館 一九六〇年

『増補史料大成（第二十巻）』（兵範記 三）臨川書店 一九六五年

『月庵醉醒記』（中）三弥井書店 二〇〇八年

〔第一章〕

池田廣司著『狂言歌謡研究集成』風間書房 一九九二年

市木武雄著『梅花無盡藏注釋』続群書類従完成会 一九九三～一九九五年

伊藤長胤著『唐官鈔』朋友書店 一九七〇年

太田善麿先生古希記念論集刊行会編『国語国文学論叢』群書 一九八八年

北川忠彦著『狂言歌謡考』和泉書院 一九九六年

小島憲之校注『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』（日本古典文学大系 69）岩波書店  
一九六四年

小松茂美編『日本絵巻大成 別巻 一遍上人絵伝』中央公論社 一九七八年

志田義秀著『室町時代の小歌と閑吟集』『国語と国文学』 一九二四年六月号

高田真治著『詩経 上』集英社 一九七〇年

高野辰之編『日本歌謡集成』（卷三 中古編）東京堂出版 一九六〇年

橋本朝生著『狂言の形成と展開』みづき書房 一九九六年

馬場あき子著『馬場あき子全集 第七巻 古典文学論』三一書房 一九九七年

馬場光子著『走る女 歌謡の中世から』筑摩書房 一九九二年

兪鹿年編『中國官制大辞典』黒龍江人民出版社 一九九二年

『三輔黄圖 三輔舊事 三輔故事 兩京新記』（叢書集成初編 3205）中華書局  
一九八五年

『楚漢春秋 漢武故事 西京雜記 漢武事略』（叢書集成初編 3759）中華書局  
一九九一年

『明皇雜録附補遺校勘記 次柳氏舊聞 開天傳信記 開元天寶遺事 東觀奏記  
寶應録』（叢書集成初編 3833）中華書局 一九八五年

狂言諸本テキスト

・天正狂言本……内山弘編『天正狂言本 本文・総索引・研究』笠間書院 一九九八年

・虎明本……池田廣司・北原保雄編『大蔵虎明本狂言集の研究 中』表現社  
一九七三年

・天理本……北原保雄他編『狂言六義全注』勉誠社 一九九一年

・和泉家古本……藝能史研究會編『日本庶民文化史料集成 第四巻 狂言』三一書房  
一九七五年

・明和中根本……法政大学鴻山文庫蔵和泉流明和中根本 野上記念法政大学能楽  
研究所 能楽資料デジタルアーカイブ

・古典文庫本……吉田幸一編『和泉流狂言集 十六』古典文庫 一九六〇年

・三百番集本……野々村戒三他編『狂言集成』能楽書林 一九七四年

- ・安永 森本……斎藤香村校訂『狂言篇 上』謡曲文庫刊行会 一九二八年
- ・安政賢通本……古川久校注『狂言集 下』朝日新聞社 一九五六年

### 〔第二章〕

- 市古貞次校注『御伽草子』（日本古典文学大系 38）岩波書店 一九五八年  
植木朝子著「合歡の木之歌：『閑吟集』小歌から」同志社国文学（七八）五三～六六頁  
二〇一三年三月  
王雲五編『佩文韻府』台湾商務印書館 一九六六年  
歐陽詢著『藝文類聚』（宋刻本）新興書局 一九七三年  
『白氏文集（四）』（新釈漢文大系第 100 卷）明治書院 一九九〇年  
二〇〇五年三月  
小野恭靖著「『閑吟集』に描かれた愛と性」『国文学 解釈と鑑賞』第七〇巻第三号  
二〇〇五年三月  
久保天隨編『古文真宝前集抄』（漢文叢書 第 11 冊）博文館 一九一四年  
信濃教育委員会編『方言雜集』古今書院 一九二六年  
尚志鈞編『本草図経』安徽科学技術出版社 一九九四年  
蔣清翊注『王子安集注』上海古籍出版社 一九九五年  
蕭滌非編『杜甫全集校註（三）』人民文學出版社 二〇一四年  
谷戸貞彦著『閑吟集は唄う：小唄や民謡の源』大元出版 二〇〇二年  
陳夢雷編『古今圖書集成』（博物彙編 六七）文星書店 一九六四年  
寺島良安編『和漢三才圖會（上、下）』東京美術 一九七〇年  
長澤規矩也著『和刻本漢籍隨筆集』（第一〇集）汲古書院 一九七二年  
『韻鏡 詞林韻釋』（叢書集成初編 1239）中華書局 一九八五年  
『簡齋集 二』（叢書集成初編 1978）中華書局 一九八五年  
『寒山子詩附拾得詩 王子安集』（四部叢刊初編集部 136）上海商務印書館  
一九三六年  
『古今注』（四部叢刊三編子部 337）台湾商務印書館 一九六六年  
『石湖居士詩集』（四部叢刊初編集部 251）上海商務印書館 一九三六年  
『全宋詩』北京大学出版社 一九九八年  
『表異録 比事摘録 廣事同纂』（叢書集成初編 194）中華書局 一九八五年

### 〔第三章〕

- 岩田準一著『本朝男色考 男色文献書志』原書房 二〇〇二年  
釜谷武志著『陶淵明』（新釈漢文大系 詩人編 1）明治書院 二〇二一年  
久保天隨編『古文真宝後集抄』（漢文叢書 第 12 冊）博文館 一九一四年

田中允編『未刊謡曲集 十一』古典文庫 一九六八年  
田中允編『未刊謡曲集 二八』古典文庫 一九七七年  
西野春雄著「能謡同名異曲考（三）」『能楽研究：能楽研究所紀要』第一九卷  
一九九五年三月  
野々村戒三編『謡曲二百五十番集』赤尾照文堂 一九七八年  
早川純三郎編『宴曲十七帖 謡曲末百番』國書刊行會 一九一二年  
星川清孝著『古文真宝（後集）』（新釈漢文大系 16）明治書院 一九六三年  
松尾剛次著『破戒と男色の仏教史』平凡社新書 二〇〇八年  
三橋順子著『女装と日本人』講談社現代新書 二〇〇八年  
『閑吟集總索引』武蔵野書院 一九六九年  
『古今著聞集』（日本古典文学大系 84）岩波書店 一九六六年  
『浄瑠璃集』（新編日本古典文学全集 77）小学館 二〇〇二年  
『日本帰化植物写真図鑑 第2巻』全国農村教育協会 二〇一五年  
『日本屏風絵集成/第四巻 人物画 漢画系人物』講談社 一九八〇年  
『日本屏風絵集成/第七巻 花鳥画 四季草花』株式会社講談社 一九八〇年  
『白氏文集（十）』（新釈漢文大系第 106 巻）明治書院 二〇一四年  
『謡曲全集（上巻）』国民文庫刊行會 一九一〇年  
『謡曲全集（下巻）』国民文庫刊行會 一九一一年  
『甦る絵巻・絵本 1 チェスター・ピーティアー・ライブラリィ所蔵 義経地獄破り』  
勉誠出版 二〇〇五年

#### 〔第四章〕

高楠順次郎編『大正新修大蔵經 第三巻本縁部上』大正一切經刊行會 一九二四年  
高楠順次郎編『大正新修大蔵經 第十巻華嚴部下』大正一切經刊行會 一九二五年  
中本環校注『狂雲集・狂雲詩集・自戒集（新撰日本古典文庫 5）』現代思潮社  
一九七六年  
濱田敦著「日本風土記山歌註解」『京都大学文学部研究紀要』第四巻  
一九五六年一月  
渡邊三男著『新修訳註日本考』新典社 一九八五年  
『落窪物語 堤中納言物語』（新編日本古典文学全集 17）小学館 二〇〇〇年  
『温庭筠詩集附別集』（四部叢刊初編集部 166）上海商務印書館 一九三六年  
『歌謡：文学との交響』（古典講演シリーズ）臨川書店 二〇〇〇年  
『皎然集 劉隨州詩集附外集 韋江州集』（四部叢刊初編集部 147）上海商務印書館  
一九三六年  
『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（新編日本古典文学全集 12）小学館  
一九九四年

『中世禅家の思想（日本思想大系 16）』岩波書店 一九七二年  
『全浙兵制考日本風土記』京都大學國文學會 一九六一年  
『日本考』（四庫全書存目叢書史部第 255 冊）齊魯書社 一九九六年  
『碧巖録索引：附種電鈔』禅文化研究所 一九九一年  
『枕草子』（新編日本古典文学全集 18）小学館 一九九七年  
『王右丞集 高常侍集 孟浩然集 元次山文集』（四部叢刊初編集部 145）  
上海商務印書館 一九三六年  
『劉夢得文集附外集』（四部叢刊初編集部 156）上海商務印書館 一九三六年

#### 近代国語辞書類（編者略）

『岩波国語辞典』岩波書店 一九六三年  
『岩波国語辞典 第二版』岩波書店 一九七一年  
『岩波国語辞典 第三版』岩波書店 一九七九年  
『岩波国語辞典 第四版』岩波書店 一九八六年  
『岩波国語辞典 第五版』岩波書店 一九九四年  
『江戸時代語辞典』角川学芸出版 二〇〇八年  
『旺文社古語辞典』旺文社 一九六〇年  
『学研国語大辞典』学習研究社 一九七八年  
『角川古語大辞典（第三卷）』角川書店 一九八七年  
『言苑』博文館 一九三八年  
『言海（第三冊自し至ち）』印刷局 一八九〇年  
『広漢和辞典（中巻）』大修館書店 一九八二年  
『広辞苑』岩波書店 一九五五年  
『広辞苑 第二版』岩波書店 一九六九年  
『広辞苑 第二版補訂版』岩波書店 一九七六年  
『広辞苑 第三版』岩波書店 一九八三年  
『広辞苑 第四版』岩波書店 一九九一年  
『広辞苑 第五版』岩波書店 一九九八年  
『広辞苑 第六版』岩波書店 二〇〇八年  
『広辞苑 第七版』岩波書店 二〇一八年  
『國語漢文ことばの林』立川文明堂 一九二二年  
『古語大辞典』小学館 一九八三年  
『時代別国語大辞典 室町時代編（第三巻）』三省堂 一九九四年  
『小学館 日本国語大辞典（第十一巻）』小学館 一九七四年  
『小学館 日本国語大辞典 第二版（第七巻）』小学館 二〇〇一年  
『新言海』日本書院 一九五九年

『新訂大言海』 富山房 一九五六年  
『新明解国語辞典』 三省堂 一九七二年  
『新明解国語辞典 第二版』 三省堂 一九七四年  
『新明解国語辞典 第三版』 三省堂 一九八一年  
『新明解国語辞典 第四版』 三省堂 一九八九年  
『新明解国語辞典 第五版』 三省堂 一九九七年  
『新明解国語辞典 第六版』 三省堂 二〇〇五年  
『大漢和辞典』 大修館書店 一九五八年  
『大言海（第二卷）』 富山房 一九三三年  
『大辞典（第十四卷）』 平凡社 一九三五年  
『大辞林』 三省堂 一九八八年  
『大辞林 第二版』 三省堂 一九九五年  
『富山房国語辞典』 富山房 一九七五年  
『日本大辞書』 日本大辞書発行所 一八九三年  
『佛教語大辞典（上巻）』 東京書籍株式会社 一九七五年  
『明解國語辭典』 三省堂 一九四三年

〔第五章〕

兪玉幸多編『くずし字用例辞典 普及版』 東京堂出版 一九九三年  
白川静訳注『詩経国風』 平凡社 一九九〇年  
陳伯君校注『阮籍集校注』 中華書局 二〇一二年  
李善他註『宋本六臣註文選』 廣文書局 一九六四年  
『晋書 全四冊』（二十四史全譯）世紀出版集團・漢語大辞典出版社 二〇〇四年  
『抄物資料集成 第六巻 毛詩抄 蒙求抄』 清文堂出版 一九七一年  
『諸本集成 倭名類聚抄〔本文編〕』 臨川書店 一九六八年  
『萬葉集③〈全四冊〉』（新編日本古典文学全集）小学館 一九九五年

〔ネット公開の参考資料〕

九州国立博物館蔵

・「陶淵明愛菊図」（【収藏品番号 A93】）

<https://collection.kyuhaku.jp/advanced/8145.html>

京都大学貴重資料デジタルアーカイブ

・『史記抄 19巻』（【請求記号】5-42/シ/2 貴）

<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00008022#?c=0&m=0&s=0&cv=0>

国立国会図書館デジタルコレクション

- ・『天隠和尚四六図』（【請求記号】特 1000-30)

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11038508>

- ・『字鏡集』（【請求記号】寄別 13-55)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2592432>

- ・『帳中香 20 巻 序 1 巻』（【請求記号】WA16-88)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2608101?tocOpened=1>

- ・『和英語林集成』（【請求記号】833-cH52w)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/993689/1>

- ・『本草綱目』（万暦一八年）（【請求記号】WB21-2)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1287025?tocOpened=1>

- ・『本草綱目』（寛永一四年）（【請求記号】特 1-3024)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2557935?tocOpened=1>

市立米沢図書館デジタルライブラリー

- ・『詩学大成抄』（【請求記号】米沢善本 146)

[http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/AA146\\_view.html](http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/AA146_view.html)

新日本古典籍総合データベース

- ・『平家正節』（【請求記号】タ 4-20-1～47)

<http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200002025/viewer/185>

- ・『日本風土記』（【請求記号】96-878)

[https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ru03/ru03\\_01055/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ru03/ru03_01055/index.html)

中國哲學書電子化計劃

- ・『識小録』

<https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&res=588974>

- ・『相山集』

<https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&res=941093>

東京国立博物館蔵

- ・「帰去来図巻 模本」（【列品番号 A-6014】 【画像番号 C0072161】）

<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0072161>

早稲田大学古典籍総合データベース

- ・『日本風土記』（【請求記号】文庫 08 D0263)

[https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08\\_d0263/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08_d0263/index.html)

・『日本風土記』（【請求記号】ル 03 01055）

[https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ru03/ru03\\_01055/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ru03/ru03_01055/index.html)

・『風俗文選』（【請求記号】：～ 05\_05700）

[https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he05/he05\\_05700/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he05/he05_05700/index.html)

SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース

<https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>

SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース

<https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>

---

注1 博士論文要約はインターネット公表されるので、記載内容については十分注意すること。

注2 原則として、図表及び参考文献リストを含めて、日本語 15,000 字、又は英語 6,000 語程度で作成すること。